

三重県

災害時協力井戸の活用

高田中学校 一年

渡辺 心晴

ある夏の暑い日、近所を散歩していると、公園の一角に「この水は飲めません」と注意書きのある井戸を発見した。重いポンプを何度も上下させて、やっと勢いよくはきだされた水を、私は飲みたい気持ちでぐつと堪えて、手を洗った。するとその水は夏の暑さを忘れてしまうくらい冷たく透き通った気持ちのよい水だった。「この水はどこからきているのだろう」ふと疑問に思った。そこで私は井戸について調べてみた。

井戸は人工的に掘ったもので、地下水をくみ上げる目的で使うものだ。井戸は大昔から人々の生活の助けとなってきた。しかし、昔はたくさんあった井戸も近年使われなくなっているものが多いのだそう。そして、私が触れた水はいわゆる地下水で、大地に降り注いだ雨や雪が数年、時には数十万年の間をかけてる過され、大地に浸透した貴重な資源だったのだ。あの日井戸水に感動した私の「井戸水はどこからくるのか」という疑問は大自然とつながっていたのだ。その時、私は「自然ってすごい」と心揺さぶられた。

一月に能登半島地震が起こった。水道管が破壊され、被災者はとても不便な生活を強いられた。飲料水については、ペットボトルなどの備蓄や応急用水などで確保されたが、大量に必要とされる生活用水は十分な供給までに相当な日数がかかった。私たちは生活用水を平均一人当たり一日200〜300リットル使用していて、これはペットボトル500ミリリットルに換算すると約400〜600本分に相当するのだそう。私ももし被災したら、たった一日でどこからそれだけの水を得るのだろうか」と絶句した。

私は今回起きた災害をニュースで目の当たりにし、この先起

こると言われている南海トラフ巨大地震に備え、「生活水の確保」が必要だという意識が強くなった。そこで井戸のことを思い出した。井戸は発災後の生活に役立つのではないかと考えた。さらに興味を持った私は近所に他の井戸があるのか知りたくなり、探索を始めた。そして隣町に「災害時協力井戸」と掲示してある井戸を発見した。後にこの井戸について調べてみると、井戸の所有者の善意で「災害によって断水が起きたときに誰でも使用してよい」と市役所に登録されている井戸であることが分かった。さらに、市役所のホームページを見ると、災害時協力井戸がある場所が表示されているマップも見ることができた。これがあれば、断水が起きた時、みんなが必要な水を確保できるのではないかと思った反面、どれだけの人が災害時協力井戸を知っているのかということも考えると、もっと多くの地域住民がこのことを知るべきなのではないかと思った。せっかく困ったときに使える井戸があるのに、知らない人がいるのはあまりにももったいない。そこで私は、より多くの人に災害時協力井戸の位置や活用法を認知・把握してもらうため、ポスターを作成しマンションや公民館の掲示板に貼りだしてみよう。またポスターだけでなく地域の人も声をかけることで、日頃からコミュニケーションをとり、災害が起きたときに共助が実現するのではないかと考えた。

私たちは、自然がもたらす災害を避けることはできない。しかし、その自然の恵みを有効に使うことで、発災後の不便な生活にもゆとりが持てるようになるのではないか。だから私はたとえ小さいことだとしても、少しでも多くの人に「災害時協力井戸」の存在を伝えたい。